

建設業と

技能者

建設業と技能者は 地域のインフラ

昨年は台風、洪水等の自然災害に各地が見舞われた年だった。被災された地域と人々に、あらためてお見舞い申し上げたい。

災害といえば、その事前の備えや事後の復旧に関して、建設業が果たす役割は大きい。ところが、被災した地域では、災害にあった建物の屋根にブルーシートがかかったまま、といった状況が見受けられるようである。

こうした状況を生んでいる理由の一つに、地域の建設業の衰退と建設業に従事する技能者の不足がある。復旧の遅れをみて感じるのは、災害が頻発するわが国においては、地域の優良な建設業や技能者たちが、地域での生活再建を早めるという意味で、水道や電気等の地域社会の生活基盤を支えるインフラストラクチャーと同様に、ソフト面でのインフラの役割を果たしているのではないかと感じる。それ

に対して、近年の状況は、地域社会においてその姿が失われつつあることを示しているに他ならない。

筆者は、これまでに大規模な災害が発生した二週間後ぐらいに現地の歴史的建造物の被害状況の調査を行ってきた。その時に、寺院や神社、集落においても地域の建設業者や技能者の不在が、応急措置のあり方や復旧速度の大きな違いとなって表れていることをみてきた。つまり、建設業者や技能者がすぐかけつけられるところは、災害後の復旧が早く、そうでないところは復旧が遅れてしまうということになる。

建設業の衰退、技能者の高齢化や減少は、既に建設業界では、大きな課題として認識されている。とはいえ、そのことに関する社会的な認識は高いとはいえない。災害時のインフラとしての建設業や技能者の役割を考えると、その課題が、地域社会の重要な課題として、あらためて多くの人々に認識されるべきだと思う。

工学院大学 理事長

後藤 治



Osamu Goto

建設業や技能者の 地域での確保

この課題を解決する答えは、すぐにはみつからないが、歴史的建造物の保存再生は、一つの突破口になり得ると筆者は考えている。なぜか。歴史的建造物の保存再生には、地域の優良な建設業と技能者の力が必要だからである。

歴史的建造物の保存再生は、地域の建設業や技能者の業の糧となるだけでなく、観光面での効果も期待できる。観光で地域が活性化すると、それによって飲食、宿泊等の新たな雇用も生まれる。

歴史的建造物の保存再生は、一般の建築物のリノベーション等と比較すると、少し金額がかかるので、公的な支援がないと、実現しにくい。一方、地方では、人口減少と高齢化によって、公共の財政も縮小している。公共のお金を歴史的建造物の保存再生に向けることは容易ではない。けれども、インフラとしての建設業や技能者の確保、観

光による雇用といったことを考えれば、公共がその費用を負担する意義は十分にあると思う。

加えて、建設業や技能者たちは、地域で飲食をし、祭りの盛んな地方では祭りに寄付したり担い手になつたりしている。こうしたことも、地域の経済を活性化させることに役立つはずだ。そう考えれば、歴史的建造物の保存再生への公共の支援は、比較的効率の良い地方再生への投資ということになる。

新しい時代の働き方

とはいえ、地域の歴史的建造物の保存再生だけでは、地域の建設業や技能者の生計は成り立たない。では、どうすればよいのか。

それを解決するキーワードが、「兼業」と「出稼ぎ」だと思う。右肩上がりに国が成長し、人口も増加していた二十世紀は、より効率的に大量のものを供給するため、各人が各種の業務を分業化し、専門性を高める時代だった。それに

対して、高齢化と少子化が進む二十一世紀は、これまで五名で行っていた業務を、四名で行う必要がでてくる時代といえる。その時に必要になる考え方が、複数の業務をこなす「兼業」なのである。見方をかえると、経済が縮小し、五名でこなしていた業務が四・五名分に圧縮されたとしても、それを四名でこなせば、各人の手取りは一・二五に上がる。経済の世界でいわれる「生産性の向上」と「最低賃金の上昇」とは、こういうことだと思ふ。

「出稼ぎ」については、地方で生計が立てられない部分は、需要の多い都市部に出て、その不足を補うということになる。地方と都市部の両方で業務をこなすことは、鉄道、道路、空路といったインフラの整備によつて、それほど難しいことではなくなっている。

「兼業」も「出稼ぎ」も、二十世紀には、あまり良くないイメージで語られる働き方だった。二十世紀には、人々は「専業」を夢見て、それを是としていた。けれども、歴史を振り返っ

てみると、建設業や技能者が「専業」で生計を立てていたかというところ、ほとんどの場合そうではない。例えば、筆者は、茨城県つくば市で建設業者や技能者にインタビューしたことがあるが、彼らは古くは、農林業や商業のかたわら建設業に従事しており、建設分野に専門化したのは、高度成長期以降に大規模な仕事が入ってくるようになってからだった。

名だたる大企業も、業務や製品が少数に特化しているところは少なく、様々な業務をこなす、様々な製品をつくっている。相手先も、国内だけでなく、広く海外にも目を向け進出している。つまり、「兼業」と「出稼ぎ」で成功しているのだ。

建設業や技能者にとって、自らの技を磨き続けることの重要性は、これからもかわらないだろう。その一方で、技に秀でてでも、自らの専門だけに固執することなく、複数の業務を積極的にこなす、視野を広げて多方面に挑戦していく者こそが、二十一世紀に生き残っていくのではないかと思う。